

淡路島方言語法の二傾向

鎌 田 良 二

一

藤原与一氏の「瀬戸内海言語図巻」(東京大学出版会)の淡路島をみると、多くの語で老年層(六十才台の女性)と少年層(中学二年女生徒)との間かなりの違いがあることがみられる。

二、三の例をあげると、「とうもろこし」は、老年層で全島、ナンバが主流をなしているが少年層では洲本市を中心として殆どがトウモロコシになっている。「つくし」は老年層でホシコ、少年層でツクシ、「めだか」は老年層では北部がミトイチ、南部でメメイタであるが少年層では全島メダカである。「かまきり」は、老年層ではホトケウマ・ホトケサンノウマであるのに少年層ではカマキリとなっている。

少年層ではこのように標準語形になっているものが多い。老年層と少年層とは五十年の差であるがこのような違いがあることが認められる。

語彙の中でも右のように教科書ことば、新聞・テレビことばとして標準語形がよく出てくるようなものは変りやすく、農業語彙・漁語彙の特殊なものは年令による変化は少ないということが認められる。

方言でもっとも変化しやすいのは語彙であり、もっとも変化し難いのは音韻・アクセントである。

語彙のこのような状況を見るにつけ、淡路島の文法を少年層である中学生についてどのようなものに変化し、どのようなものが変化していないかということについて見たいものである。

ここに、昭和五十六年に隨地調査した結果によりその一傾向をみることにする。

淡路島は瀬戸内海にあり、兵庫県下にあるが、南は徳島県に接し、交通路では古くから大阪府の南部や和歌山県との交渉の深い地である。ここに、島の概観を記しておく。

この島はわが国で、佐渡島・奄美大島につぐ第三の大島である。気候がよく阪神にも近くて、果樹・草花をはじめ近郊野菜類を出荷するほか、近年は観光の島としての発展もめざましいものがある。

淡路は畿内から阿波への路という意味であれば、畿内と徳島との両方言のつながりの性質を持つものと考えられる。

歴史的にみるならば、奈良・平安の時代から皇族や宮廷人のこの地に出入することも多く、その路には、難波からの線、奈良から紀の川沿いに下って和歌山から入る線。また、奈良・京都から葛城山脈の西部を経て和歌浦あるいは加太からの線があったようである。

現在の状況をみるに、島の二大産業の農産物は阪神方面へ、水産物は大阪や阪神間と、堺市や和歌山市、和歌山県加太へと行くのである。

徳島との関係は、かつて徳島藩下におかれていたこともあり

徳島のことばが一部に存在している。

地理的には明石市や東播（播磨東部）地域にもっとも近いにもかかわらずこれらの地域との方言的影響が少いのは、明石との間に交通が開けたのが近々のことであり、しかも阪神地方への一足場の存在である。明石・東播とは経済的にも政治的にも直接関係がなかったからである。

このように和歌山との、あるいは、和泉との関係が古くからあったのであり、今もあるのである。

洲本市由良方言は和歌山市的、加太的で、淡路北部の岩屋方言は大阪府泉南部的であるといわれている。

淡路方言の研究者弥宜田竜昇氏は「方言とところどころ——こ」とば兵庫縣——」（『のじぎく文庫』神戸新聞社）で淡路方言について次のように記している。

四周を海で囲まれた島であるから、言語的には著しく孤立的であろうと考えたら、それは見当違いである。

また、ひとつかみの島だから、

傀儡師浪の淡路の訛りかな

という永田青嵐（秀次郎）の俳句に出てくる淡路訛りは、一律であろう、と思つたら、それも見当違いである。島内の方言は、大体北部（津名郡の北部）・中部（津名郡南部と洲本市

周辺(南部(三原郡)の三つのグループに分けることができる。

それは何故か。地質学者は、この島はもと北部山塊・中部山塊・南部山塊からなっており、後に沖積・隆起の現象によって、三つの山塊が迷らなつたものとみている。このことは現在の地勢からも容易に伺われるが、それが主要な原因であらう。

今、三つのグループとのべたが、それももつとこまかくなめると、これら三つの他に、北淡町富島・淡路町岩屋・洲本市由良の三つの特異な地点がある。この三つの地点はそれぞれ、やや孤立した地形になつていて、三地点相互はもちろん、前記三つのグループとも少し趣を異にしている。要約すれば、島のことばは、大きく眺めるときは三グループであるが、小さく見ると、六区画ということになる。

私はさきに、「関西に於ける地方共通語化について」(「国語学一二六集」国語学会)と題して、兵庫県北部の但馬地域の山陰式方言が、いかに大阪式になつていくか、山陰は東京型の要素を多くもつた地域でありながら、それがいかに近畿の中心地大阪的になつていくかを見たことがある。

この見方からすれば、淡路の三区画ないし六区画は、それぞ

れ、淡路の中心地、洲本市ことばにならうとし、洲本は、より文化的中心地の阪神ことばにならうとしていたのではないだろうかと考えられる。

この立場から、本稿は、淡路の特色と見られる語法をとりあげ、その最近の傾向を見ようとするものである。

二

今回は語法上重要と考えられる項目二、三について淡路における最近の傾向を見ることにする。

指定助動詞「ダ」

ダ・ジャ・ヤの全国分布図で、淡路はジャとダの並用地域になつている。

ジャ専用地域である中国地方に接する播磨西部にもジャがあるが、それよりも淡路のジャの勢力の方が強いようだ。

淡路では推量形はジャローではなく、ダローで、それがくずれてダーとなる。

「近畿方言の総合的研究」の淡路に、イマヤッタラキトシゲーカ(今だったら来ているだろうか)の例が出ているが、このように、ヤッタラとダーカの両系統がまじることがある。

また、連用形のテについて、同書に次の例がでてゐる。

ミナトユータラミルモンテナイ(見るなど言つたら見るものでない)、アブナイテナイカ(危いじゃないか)となり、また、デーともなつて、キノーキタデーカ(昨日来たじゃないか)、ソナイセーデモエデーカ(そんなにしなくてもよいじゃないか)となつてゐるが、このテは一般的に言つてかなり珍しいものと思われる。東京でも、ソレテイイジヤナイカと、ジャになるものである。大阪ではヤナイカとヤになるものであるが、見方によつてはこれは一種の助詞化した「テ」と見てもよいかと考えられる。

また、このテは、昨日行ツチャロが(昨日行つただろうかな)とタ行音の次に続くときはチャロともなる。

服部敬之氏「洲本ことばの文末表現——母のことばを手がかりに——」(『方言研究叢書 第五卷』広島方言研究所紀要)に次のように記してある。

淡路では、この三系(注・タ・ジャ・ヤ)の助動詞をすべて用ゐる。

ホヤサカイ、アカンノジャ(そうだから、だめなのです)
(中女↓中女)のように、一人のことばの中に、「ヤ」と「ジャ」が共存している例も少なくない。淡路で、地域的にみる

と、「ヤ」の使用は、洲本で最も盛んであり、洲本を過ぎるほどに、概して、少ない。「ジャ」の方はその逆である。年令的に見れば、年少者に、「ヤ」の使用が多く、年長者に、「ジャ」の使用が多い。意識としても、「ヤ」は、都会的なことば、「ジャ」は、田舎ことば、年寄りことばという気持がある。また、「タ」は特定の活用形のみが用いられ、終止形としての用法は、見られないが、これも共存しているといえよう。

洲本では、タ系の断定の助動詞の終止形の用例がなく、推量形だけが用いられる。それも、「デー」の形を使う。同じ淡路でも、東部の津名町あたりでは、「ダロ」が使われており、北淡方面では、「ダレ」、また、南淡町灘方面では、「ダオ」が使われている。「デー」というのは、淡路では、洲本だけのようである。洲本の人は、「デー」を連発するので、耳につくようである。「デー」より「デー」の方が話しかける気持を強く表現している。また、「デー」に文末詞「ナ」が加わると詠嘆して話しかける親しみが加えられる。

実際には、「デー」よりも「デーナ」の方がよく用いられる。トシヤ イトンターナ(年令が老いてゐるでしょう)
洲本でも、「ダロ」を全く使わぬわけでもない。

エート オモタン グロー ナ (よいと思つたのでしょあ)
 「デー」が相手に話しかける気持の強いのに對して、しみじみと、自分の胸に推し量る気持を示している。ただし、「テロ」単独では使われないで、「ナー」を伴うのが普通である。

と。右の記述にある通り、テ終止は用いられないから、助動詞でなく形容動詞の場合も、静カナ ナアのように、ナ終止になる。形容動詞のナ終止の形は江戸時代から存在するものであるが、一般的な終止形を用いないで他の活用形で終らせる用法というのはやはり関西式のことばをやわらげる言い方の一種だろうか。大阪弁の命令法が、普通の命令形を用いないで、連用形を用いて、ハヨ 行き(早く行け)の形になると相通じるところがあるのだろうか。

前田勇著『近世上方語辞典』(東京堂)の「や」の項、
 や(助動) 指定助動詞「ぢや」の説。弘化頃から現れる。
 ただし、未然形「やろ」が多く、終止形「や」はまれである。
 と。これも終止形は用いられず、未然形の用法が多いことが記されている。

ゲケドも同様で、接続詞や接続助詞的な働きをする一語と考えられる用法がある。

昭和五十六年に淡路島の中学校六校・高等学校三校の各一クラスについて次のような調査を行なつた。

まず、項目ごとにその結果を示す。

(表1) について、調査地点①岩屋、②津名の番号は、(図)にあげた淡路島地図に付した地点番号と一致する。

- | | | |
|---|-------------|--------------|
| ① | 兵庫県津名郡淡路町岩屋 | 岩屋中学校 |
| ② | 津名町大谷 | 津名中学校 |
| ③ | 洲本市物部 | 青雲中学校(洲本と記す) |
| ④ | 津名郡五色町広石北 | 五色中学校 |
| ⑤ | 三原郡三原町 | 三原中学校 |
| ⑥ | 西淡町 | 御原中学校 |
| | 津名郡津名町 | 津名高等学校 |
| | 洲本市上物部 | 洲本高等学校 |
| | 三原郡三原町 | 三原高等学校 |

各中学校とも二年または三年生で、一クラスは三十名から四十名程度であるので、男子・女子はその半数ずつで、(表1)の各欄は実数十五名から二十名程度のもをその項目使用者を百分率で示したものであるから、たとえば五パーセントといつても実数は一名か二名程度のものである。二クラスについて調査した学校もある。

なお、淡路島の文化的中心地は洲本市であり、この島の唯一の市である。

高等学校についても調査したが校(学)区が広く、たとえば五色中学校の卒業生は洲本高校に行く者もあり、津名高校に行く者となるなど、そのため本稿のように地点別にした(表)では補助資料程度の意味で見ていただきたいのであるが、これも居住地を記入してもらっているので、高校生の居住地別の(表)も作ったがこれは別の機会に示したい。

ただし、大きくは、三原郡在住者が三原高校に、津名郡在住者が津名高校に在学していることはいうまでもない。

中学校の場合、主な生育地でその校区外のものはいない。

(表)のダッタの項は、ソーダッタ・ソーヤッタ・ソージャッタのどれを使うか、ダケドの項は、ソーダケド・ソーヤケド(ソヤケド)・ソージャケドのどれを使うか、使う者の人数をパーセントで示したものである。

先にも記したように、全国分布図で見ると淡路島はジャとダとの併用地域になっているが、今回の調査で同一人物で二つを併用するという者は見られなかった。従って、この島はジャを使う人とダを使う人とがあるといういわば並存地域ということになろう。

しかし、この(表1)で見ると現在の中学生・高校生ではヤ系が圧倒的に多く、ジャ系は実人員で言えば一クラスに一人か二人ということになる。ダッタ・ダケドがいくらか多いということとはダ系が残っていることになるが、一つには新しい標準式の、そして、接続詞的のダケドからの影響も考えられる。

淡路島の周囲は、岡山県はジャ、阪神地方はヤ、大阪、和歌山もヤで、その一部にジャがある。香川はヤ、徳島はジャであるが、香川・徳島の淡路島寄りに一部ダ地域がある。だから、この島にダがあることは当然考えられることである。

このように周囲にジャがあることから、形容動詞の「静かだ」ではジャがかなり見られる。

兵庫県赤穂市など岡山県のジャ地域に接するところでは、ナシヤカンシヤ文句バツカリ言う(なんだ、かんだと文句ばかり言う)のように一種の慣用句のようになっているときにはジャが出てくるが、これと同じように「静かジャ」は一語としてこの形が残っているのであろうか。

女子中学生の項を見ると、岩屋で七十七パーセントもあるのに対し、都市部の洲本市では「静かヤ」の方が九十四パーセント、ジャはゼロとなっている。都市部の若い女性が早く、より文化的中心地の神戸・大阪式のヤをとり入れることになる。

格助詞「が」について

虫明吉治郎氏「岡山・広島」(「方言学講座 第三卷」東京堂)

によれば岡山では格助詞の融合が多いということであるが、近畿全般として格助詞を省くことは多いが一般に融合は少ないように思われる。

ところが、淡路島では、古くから「が」は名詞と融合した形が使われることが多く、「雨が」はアミヤア、「舟が」はフニヤアとなる。「竹が」はタキヤアである。

このため、「は」と融合した「雨は」もアミヤアとなり、また、「竹が」と「竹は」、「滝が」と「滝は」の四つともタキヤアとなつてしまつて区別がつかなくなる。そうなれば、さらに、「鷹が」「鷹は」「宅が」「宅は」「蛸が」「蛸は」などもみなタキヤアとなつてしまつて区別がなくなつてしまうことになる。

この点、熊野とよく似ているということだ。和歌山県的ということの一端がうかがえる。

(表2)の「雨」「船」の項は「雨が」「船が」を、それぞれアミヤア・フニヤアという者の百分率である。

これで見ると、男子で十二パーセント程度で、女子はゼロが多く、使つても一クラスで一名程度ということになる。このような淡路の特徴的な言い方が、女子では特になくなりかけている。

高校生の女子も同じである。

中学校の先生の話では、現在でも漁業の男成人にはこの形が盛んにあらわれるということである。

ナ行系文末の「ニー」

疑問の「か」について「行コカニー」と、カニーの形で使われる。洲本には、自分の意志の迷いをあらわす場合、疑問のことはを受けて言う。

ドナイショニー(どうしようかしら)。「ネ・ネー」は東京語的な感じがあつて全く用いない。

「ノ・ノー」は、いろいろのニュアンスがあつて淡路全域で用いられている。

(表2)の「行」は「行こうか」を「行コカニー」を使う者。「どう」は「どうしようか」を「ドナイショニー」などを使う者の百分率である。

「行コカニー」よりも「ドナイショニー」の方が多いようだ。これは、この「ニ」が単なる「ネ」とか「ノ」とかとは違つて、より心の迷いをあらわす面が強いものであることを示しているのではなからうか。

「行コカニー」も、疑問の「か」を受けてはいるが、それよりもさらに「どうしようか」の「どう」の形を受ける方に、よ

り付きやすいということが言えるのだろうか。

「ネ」「ノ」などが相手に同意を求めるといふ積極性があるのに対して、これは心の迷いをあらわすといふ消極的な面があるようにうかがえる。

そのような性格の語であるためか女子の方の数が多いようである。

この点、名詞・動詞などといくらか違いがあるようだ。

ラ行「る」拒否

古来、「なるめり」が「なめり」「なめり」、「けるらし」が「けらし」となり、「薬師(くすりし)」が「くすし」となるように、現代でも、「わかない」が「わかんない」、「やらない」が「やんない」となりラ行音を脱落させること、または、ラ行音の次にナ行音がくるときに転化させることが行なわれているが、これを一種のラ行音を拒否する現象とみるならば、淡路島では、ラ行音の連体形は「る」を拒否して促音になるといふことがある。

「食べる時」はタベットキとなる。

このように「る」を拒否するため「居るか」はイツケ(ケは疑問)、「するし」はスッシ、「寝るぜ(ぞ)」はネッドとなる。

なお、ついでに音便形について記すと次のようなことがある。

サ行イ音便についてイ音便になるものは、田中万兵衛氏の「淡路方言研究」(昭九)では、サイテ(指して)と、ヌライテ(濡

らして)の二語だけであると記されているが現在の状況はどうだろうか、他のサ行五段活用動詞もイ音便になってきているのだろうか、イ音便はなくなってきているのだろうか。

また、略音便の形は多くて、「持って来た」はモチキタ、「取って来た」はトテキタのようになる。

(表2)では、ラ行「る」拒否の形で、連体形が促音になることについて調査したものについて記した。

「食べる時」をタベットキと言う者の百分率である。

これはまた、女子の方が多くなっている。中学・高校とも、女子が多いということは、東京弁の「わかない」がワカンナイとなるように、ラ行拒否現象は今後ますます進むということなのであろう。

ラ行拒否現象は東京で広まっているのと同様、全国的な拡大にあるのだろうか。あるいは、地域性というよりも女子中学・高校生の語感からくる現象なのだろうか。これについてはもっと広い地域における中学・高校生の現状について調査してみたい。

否定・不可能表現について

淡路の一般活用動詞の可能形は起キレル・受ケレルである。

その否定形は、起キレラン、受ケレランとなる。

ランを一つの助動詞のように意識して、ルに對してランとなつたものであろう。そして上の動詞が、オキレ・ウケレの形となれば、それに否定のヘンがつけば、起キレヘン・受ケレヘンとなる。

ヘンは單なる否定であるが、不可能はレヘンとなる。レヘンが不可能として確立すると、起キレ・受ケレという動詞にこれがつくので起キレにレヘンがついて、起キレレヘン・受ケレにレヘンがついて受ケレレヘンという形が成立する。

この形は、但馬にもあり、県の北と南とで一致するものである。この形は洲本あたりがもとで、それがやがて全島に広まったものだといふ。

動詞 可 能 ラン打消 レン打消 レヘン打消
書ク カケル カケラン カケレン カケレヘン
起キル オキレル オキレラン オキレレン オキレレヘン
受ケル ウケレル ウケレラン ウケレレン ウケレレヘン
(表2)は、食ベレヘン(否定)・見レヘン(否定)・食ベレレヘン(不可能)・見レレヘン(不可能)の形を使うかどうかについて調査したものである。

この言ひ方は洲本市あたりからはじまったといわれるように、

洲本市に多く、洲本から離れた北の岩屋、南の三原・御原は洲本よりもいくらか少ないようである。

文化的中心地の洲本からはじまったことばとなれば、この形は勢力を広め全島に及ぶものであろうかと考えられる。

そして、しかも、全地域とも女子の方に多いということはずまず勢力をもって広まっていくものと考えられる。

一般的に文化的中心地の若い女が新しい言ひ方を早くとり入れそれをやがて男が使うようになり、そしてそれが中心地から離れた地域に次第に広まっていくものである。

反対に、古い言ひ方をながく保っているのは僻地の老女である。僻地でも男は仕事に出かける関係上、比較的新しい言ひ方をとり入れてくるが、僻地の老女はその地を動かかないので古い語形を保っているのである。

今、洲本市という中心地の女子中学生にこの語形が多いといふことは、やがて全島に広まるものと考えられるのである。

特に、高校生の女子では百パーセントになっているなどにその傾向が見られる。

「——と違うか」の形について

指定助動詞ダ・ジャ・ヤのいずれを使うかについて調査するために、先に、ソーダッタ・ソーヤッタ・ソージャッタと、ソ

「ゲケド・ソーヤケド(ソヤケド)・ソージャケドについて調べたのであるが、それと同時に、東条操氏の「語法文例調査」の中から次の三文例についても調査した。

①ちよつと来い、ここを見ろ、このいたずらはお前だろう。

②死ぬ人もあるし、生まれるものもあるのだ。

③今夜は冷えるから、夜中に雪が降るだろう。

この②の場合、「あるのだ」の「だ」をやという形で答えた者もあるが、なかには「ウマレルモンモ アルネンデエ」の形で答える女子もかなりあった。「だ」とか「や」という断定的に言い切る終止形はあまり用いないというのが関西式のやわらかさを保つものと見られる。

①③の「だろう」は、もちろん、ダロー・ヤロー・ジャローの三つのうちいずれかを答えてくれるものと期待していたのであるが、結果は、「オ前トチガウカ(チャウカ)」、「雪フンダア」、「雪トチガウカ」の形が意外に多かった。

「雪フンダア」は、「雪(が) 降るだろう」で、このダアはダローの形と解されるが、「トチガウカ」は、特に①の「お前」ときめつけてかかるような形に「だろう」という一応は推量形をとってはいるものの、きつい言い方は関西的ではないということになり、「トチガウカ」を使ったものであろう。

大石初太郎氏の「敬意の度合いの測定」(『月刊文法 一巻二号』)に次のようにある。

関東の「——ダロウ」に對する関西の「——トチガウカ」も型の相違の一つだが、もともとやはり、村人態度の違いに基づくものと見るべきだろう

と、このように「トチガウカ」は新しい関西式の言い方ということになる。

(表2)の「チャウ」は、①の文例で「トチガウカ(チャウカ)」を使う者の百分率を示したものである。

これも女子の方が多く、中学女子よりも、高校女子の方が多い。高校では女子が男子の二倍近くになっているところも見られる。

この新しい関西式のやわらかい言い方は若い女からやがて男にも広がり、それが全島に受け入れられていくものと考えられる。以上ほんの二、三の語法についてであるが、淡路島の語法が、一挙に標準語化・東京語化していくものではなく、より文化的中心地の神戸・大阪式になっていくようすを見たのである。

本稿についての臨地調査は、昭和五十六年に行なった。ご協力いただいた中学生、高校生の皆さんにお礼を申しのべるとともに、現地でお世話下さった、県立津名高校 中村圭一教諭、

(表1)

	(男)								
	ダッタ			ダケド			静カダ		
(中学)	ダ	ヤ	ジャ	ダ	ヤ	ジャ	ダ	ヤ	ジャ
①岩屋	11	89	0	6	94	0	0	89	11
②津名	27	64	9	15	75	10	21	58	21
③洲本	45	55	0	10	90	0	24	67	9
④五色	45	55	0	12	88	0	11	78	11
⑤三原	39	56	5	21	74	5	37	42	21
⑥御原	36	59	5	0	100	0	27	55	18
(高校)									
津名	24	76	0	0	100	0	10	61	29
洲本	13	87	0	4	87	9	5	90	5
三原	32	63	5	0	100	0	12	50	38

郡司洋 教諭、県立洲本高校 久井知秋教諭、県立三原高校 妙見正教諭に、また、各中学校で直接お世話になった先生方に謝意を表す。

	(女)								
	ダッタ			ダケド			静カダ		
(中学)	ダ	ヤ	ジャ	ダ	ヤ	ジャ	ダ	ヤ	ジャ
①岩屋	0	92	8	0	100	0	0	23	77
②津名	25	75	0	7	93	0	7	73	20
③洲本	29	71	0	6	94	0	6	94	0
④五色	46	54	0	9	91	0	19	58	23
⑤三原	20	80	0	0	100	0	28	66	6
⑥御原	42	54	4	9	91	0	29	57	14
(高校)									
津名	29	71	0	0	100	0	10	85	5
洲本	32	68	0	9	91	0	5	86	9
三原	41	59	0	13	87	0	28	50	22

なお、本稿と関連するものとして、次のものをご覧いただきたい。
拙稿「関西に於ける地方共通語化について」(『国語学』二二二六集) 国語学会)

(表 2)

(中学)		雨	船	行	どう	食る時	食・否	見・否	食・不	見・不	チャウ
①岩屋	男	12	12	0	0	35	29	24	0	18	24
	女	0	0	6	6	62	15	15	31	31	38
②津名	男	15	15	0	7	80	75	90	70	75	47
	女	0	7	20	25	100	87	93	93	100	55
③洲本	男	15	10	10	67	60	75	80	55	50	20
	女	11	11	11	55	61	67	78	50	61	28
④五色	男	6	0	18	32	88	80	75	81	81	31
	女	5	5	13	50	85	95	91	86	86	36
⑤三原	男	6	6	11	50	89	44	22	39	28	11
	女	0	0	12	41	94	47	18	59	50	47
⑥御原	男	0	0	0	60	80	40	45	50	50	20
	女	0	0	0	65	95	40	20	45	45	25
(高校)											
津名	男	26	16	0	17	79	84	84	84	79	43
	女	0	0	0	0	83	100	100	96	83	83
洲本	男	19	19	5	41	76	62	76	81	86	29
	女	0	0	10	67	95	73	82	64	73	50
三原	男	6	0	19	69	88	25	13	63	69	38
	女	4	0	18	75	79	32	7	39	50	43

本稿は、昭和五十六年度、文部省の科学研究費補助金による研究の一部である。

